

城陽市青谷での里山活動とまちづくり

里山学研究センター・研究員
好廣 眞一

今年行った活動の中から、(1)城陽生きもの調査隊、(2)城陽市青谷地区における生物気候、(3)青谷らうんど、の3つを報告したい。

(1) 城陽生きもの調査隊

調査隊は2020年に発足23年を迎えた。3月に総会を開いて1年の活動計画を決めた(表1)。ところが、新型コロナウイルス感染拡大のため、3月の「梅まつり青谷くぬぎ村子ども広場」、4月の「春の野草と山菜てんぷら」、5月の「木津川堤防植物調査」と「カエルの声を聞く会」は中止せざるを得なくなった。6月の「ウメの収穫と柑橘類の植樹」は行えたが、7月の「野草観察と植物標本作り&昆虫探し」は再び中止した。

秋、9月の「木津川バッタ取り」、10月の「キノコ探し」はなんとか行えた。しかし、11月の「カブト・クワガタ繁殖場作り」は中止、12月の「ムササビ観察会」は、例会としてはやらず、自由参加とした。1月と2月の土器づくり、3月の梅まつり青谷くぬぎ村子ども広場は中止を決めた。

表1. 城陽生きもの調査隊2020年度の取組と場所

4月26日(日) 春の野草と山菜天ぷら(くぬぎ村)	}	中止
5月17日(日) 堤防植物調査(木津川堤防野草保存区域)		
6月 日(日) カエルの声を聞く会(観音堂夜)		
6月21日(日) ウメの収穫柑橘類の植樹(くぬぎ村)	}	中止
7月26日(日) 植物標本作り&昆虫さがし(くぬぎ村)		
8月 (未定)		
9月13日(日) バッタとり(木津川河川敷)		
10月18日(日) キノコさがし(くぬぎ村)		
11月22日(日) カブト・クワガタ繁殖場づくり(くぬぎ村)		—中止
12月19日(土) ムササビ観察会(宇治大吉山夜)		—自由参加
1月 日() 土器づくり・土ひねり(くぬぎ村)	}	中止
2月 日() 土器づくり・焼成&子ども広場準備(くぬぎ村)		
3月 日() 子ども広場(くぬぎ村)		

①ウメの収穫…6月21日、青谷くぬぎ村でウメの収穫とミカン類の植樹を行った。3-5月の3つの取組を中止した後の久々の例会で、参加者はこども23人、おとな27人の50人だった。10時過ぎに開始。参加者家族ごとの自己紹介のあと、田中さん(梅工房)に梅の話をしてもらう。青谷梅林の歴史、青谷の梅、城州白と和歌山南部の南高梅の特徴、シカやイノシシによる被害

など。梅の木にはトゲがありケガしやすいので軍手をはめて取ろう。密集をさけ、手をアルコール消毒しながら。ワークシートを準備して配り、今日の観察の手引きにし、記録をつけてもらうこととした。

10時半からくぬぎ村より下の畑で梅の実を取り始める。子どもたちは、手を伸ばしたり、棒でたたいたり木に登って梅の実をつみとる。おとなが枝をまげて子どもが取る、という連携も。お父さんに肩車してもらって楽し気にとる子もあり。青谷全体では今年、梅の花が早く咲いてミツバチによる受粉が不十分だったため不作だったが、ここでは割合多くとれた。取った梅の入ったビニール袋を、子どもたちが「重よう」と言いながらくぬぎ村まで運び上げた。次はくぬぎ村で梅の実とり。実はたくさんついているが高いので、おとなと大きい子で取る。木に登ると枝が折れそう。みんなで注意し合いながらすっかり取り尽くした。

取った梅の実の重さを測ると64kg。去年の115kgよりはだいぶ少ないが、おとしは60kg、その前は55kgだったので平年よりやや多めか。1kgずつ小分けして袋に入れ1家族1袋ずつのお土産と、さらに欲しい人に分け、残った梅の実を子どもたちが「つかみどり」した。

午後はミカン類の木とウマノスズクサ、アジサイを植えた。くぬぎ村にアゲハチョウたちを呼ぶためだ。家族ごとに穴を掘って植え、しっかり土をおさえて水をやる。13時から終わりの会。子どもたちの感想は「梅の実取りが楽しかった」、「木登りした」、「カマキリがいた」、「梅の実がゴンゴン頭にあたった」と楽しそうに話してくれた。各例会で参加者全員に渡す生きものカード、この日は、城陽にやってきたコウノトリを木場由喜知君（小学4年）が撮影したものだった。今回は小学生や小学生前の子どもたちがのびのび、生き生き活動してくれたし、中学生、高校生は、受付、計量、植樹と大活躍してくれたのがうれしかった。

②木津川バッタ取り…9月13日、雷雨は夜のうちにあがり、木津川河川敷運動公園駐車地南の広場に、子どもづれ4家族を含め子ども5人、おとな12人の計17人が集まった。10時の集合前から、子どもたちは網を振り回してバッタ、トンボを取り始めている。そろったところで竹内康さんが初めの挨拶、久田晴生さんから参加者に、今日出てきそうなバッタ類のカラー写真をのせたワークシートが配られた。まずは集合した広場と周囲の草むらでバッタ取りを始める。マダラバッタが、まだ翅がぬれているのか飛び上がらずに捕まり、大型のショウリョウバッタやクビキリギリス、中型のウスイロササキリやツチイナゴ、小型のヒシバッタやオンブバッタを次々と見つけては取り、ワークシートと照らし合わせて種名を確認して放す。30分ほど取ってから木津川河原へ移動し、高く飛ぶトノサマバッタ、クルマバッタモドキ、マダラバッタを追いかけて、虫取り網で捕まえながらカワラバッタを捜す。子どもたちが、飛ぶバッタたちを求め河原を夢中に走り回る姿はまことに好い。我を忘れて一生懸命に何かを追いかける体験は、得がたく、貴重なものだ。残念ながら、今年も去年に続いてカワラバッタ（絶滅危惧種）は見つけられなかったが、一番高く、長く飛ぶトノサマバッタは何匹か捕まえられた。河原の端の草原との境でマイマイカブリの死体を発見した。

河原から集合場所へ戻る途中の草原で、小学2年生2人がオオカマキリやオナガササキリを見つけて大はしゃぎ。草原横の木の枝に、チョウセンカマキリの卵とニッポンマイマイ、アシナガバチの巣（使い終わったらしい）も見つかった。集合した広場で、何がみつかったかをワークシートに丸付けしている間に、エンマコオロギが見つかった。小型のコオロギ類は、音は聞いたものの捕らえられなかった。ウスバキトンボ、シオカラトンボ、イトトンボも見つけ

た。

子どもたちの感想は、カタツムリがいた、トンボ育てたい、エンマコオロギが見つかって良かったなど虫取りを満喫したようだ。正午過ぎに解散。そのあとトノサマバッタが交尾しているのを見つけ、皆で観察した。子どもだけでなく、おとなたちも河原を走り回る楽しい例会だった。

③キノコ探し…10月18日、青谷くぬぎ村周辺のキノコを発見、観察して、里山という環境を肌で感じながら生きものの多様性や自然界におけるキノコの役割を知ろうとした。雨上がりで土や草はぬれていた。くぬぎ村南西500mの、中向河原遊園地に子ども5人とおとな12人の17名が集まり、10時10分久田さんの挨拶と自己紹介のあと、久田さんから「キノコはいろんなところに生えます。土の上で見つけたら、スコップを周りの地面に差し込んで、下の方からキノコ全体を採って下さい」。前夜の冷たい空気が残り心地良い。遊園地東端の林、竹林に沿って歩きながら、次々キノコや生きものたちを見つける子どもたち。「見つけたよ。これなに？」と久田さんに尋ねると、久田さんはキノコの名を解説付きで答え、生きものたちの名前は竹内さんほかのおとなたちが口々に言う。

坂を上って、竹林の中でキノコを捜す。濡れた地面は枯れ葉や竹の葉が散り敷き、枯れた木や竹が散乱しているが、子どもたちは元気に探しまわり、次々とキノコを見てけていく。落葉の上に出ているキノコ、枯れて地にある木から生えているキノコ。地面で見つけたキノコを深く掘った男の子、久田さんに見せると、「ブナノモリツエタケです。よく似たキノコがあり、深いところまで丁寧に掘ってくれたから見分けられました。」ブナはなくてもクヌギがあれば育つとのこと。ゆっくりとくぬぎ村の方へ上りながらキノコを捜す。桃色が美しいケショウハツ、オレンジ色のダイダイガサ、大きなカラカサタケ、おいしいキクラゲや美しいが猛毒のニガクリタケとドクツルタケ、梅の種から出ているキノコや甲虫の死体から生えた冬虫夏草。まんまるのスッポンタケを子どもたちがカッターナイフで切り、中がどうなっているか見るとまっしろい幼菌が折りたたまれている。湿った所に置いておくと数時間で茎が伸びカサがひらくと聞いて、別のスッポンタケを見つけて、自宅へ持ち帰る子も。チシオタケを切ると血のように赤い汁が出た！スエヒロタケは胞子を吸い込んで肺にキノコが生えた人がいるという。

くぬぎ村まで上がり、ブルーシートを広げて採取したキノコを種ごとにまとめて置く。いやはやたくさんのキノコ達。それぞれお好みの場所に生えていた。雨が降ってたくさんのキノコ達が出てきた。「春、夏、秋と違うキノコ達が出てきます。キノコは、胞子を作って子どもを増やすため菌糸という本体がつくる繁殖器官です」。小さいコオロギをつかまえて図鑑で調べると両目の間に1本の直線あり。「タンボコオロギだ」。エンマ以外のコオロギを同定した。

弁当のあとはネーブル、ユズ、キンカンの植樹。育ってアゲハ達が来てくれるといいね。くぬぎ村で生きもの達を探す。ナナフシは見事に枝のよう。久々のヤマアカガエルにヤモリの子ども。キノコ達はくぬぎ村の林に返した。子どもたちの好奇心、探求心の旺盛さと眼力に感心した例会だった。食べられると聞いてホコリタケを持ち帰り、ニンニクと焼いてみた家族もあり。「味や香りはないが、ふわふわとした食感がおいしかった」とのことだった。

④ムササビ観察会…12月19日夕方4時半、宇治川右岸の朝霧橋たもとに集まったのは、学生3人を含むおとなばかり10人。例年と違いコロナウイルス蔓延のため子どもたちが来なくて残念

だ。上西実さんから、宇治大吉山に暮らすけものたちは、ニホンジカ、イノシシ、ニホンアナグマ、キツネ、タヌキ、アライグマ、ホンドテン、ハクビシンというが、ムササビとニホンジカがよく見られると紹介。ムササビが主食の木の葉を食べる際、折りたたんでかじるので、特有の形になる。そんな木の葉はムササビの巣がある木の目印になる、とのこと。

さてムササビ探しに出発。興聖寺の東から大吉山に入る。木星と土星の大接近を見てから七曲の道を上っていくと、上西さんがさっそくムササビを発見。静かに観察。ライトで照らされるとムササビは木の枝上で動かなくなる。前足に4本、後足に5本あるツメで枝をしっかりとぎって。山道をさらに上がっていくとシカを発見。次に別のムササビを見て大吉山展望所へ。ここでムササビの声を聞く。これから降りていく林から聞こえる。降りていくとまずシカ発見、ついでムササビがいた。さきほど鳴いていたのと同じ个体か？そして宇治上神社へ降り、宇治川朝霧橋のたもとに戻ってまとめの会。ムササビ3頭とシカを2回数頭見られた。

12月のムササビ観察会は例年凍えるほど寒いが、今年はさほど冷え込まなかった。来年は春に生まれた赤ちゃんが顔を出す6月頃に、子どもたちと一緒に見に来たいが。新型コロナ感染がおさまるだろうか？

(2) 城陽市青谷地域の生物気候

昨秋、気象庁は、これまで日本各地で続けてきた多数の動植物による気候調査を、植物3種だけに限定する、と発表した。環境の変化によって多くの地で多くの動植物が観測しづらくなったためだと言う。これは、日本の気候という、多様で変化の激しい対象にどう取り組むのかの典型例だ。日本列島は南北に長く、海を隔てた4島とその近辺のたくさんの島々からなり、北は亜寒帯、南は亜熱帯で、3000mを超える高山もあり、春・夏・秋・冬と四季の変化も激しい。地域ごとにたいへん多様な生物気候がある。それらを観測し切るのは大変だろうと思う一方で、それこそ日本の多様性を知る重要で貴重な調査だとも考える。

この難問を解決する方法は、各都道府県に何カ所かずつ気象観測ステーションを置いて、それぞれ地域の有志グループに観察と記録をゆだねることであろう。各地域グループは互にゆるやかに連携しだし、観測内容や観測方法を交流し始めるだろう。そうした全国規模の調査・観測を見据えつつ、わが地、青谷地域において行ってきた生きものの気候を記しておきたい。将来他の地域とつぎ合わせて、動植物の種や観測内容を選択するために。ここでは2018年～2020年度の3年分を記す。いずれも、京都府城陽市中中の郷1-6の自宅周辺で見聞きし、姿、声、音を記録したものだ。

表2 京都府城陽市青谷地域で記録された、鳥類・昆虫類の見聞き始め日と見聞き終り日

種名 年度	ウグイス	ホトトギス	ツグミ (*1)	キリギリス	アブラゼミ
2018	3月2日-7月27日	-	11月15日- 2019年4月5日	7月16日- 9月30日	-
2019	-	5月16日- 6月23日	11月15日- 2020年4月24日	6月30日-	7月15日- 8月31日
2020	3月2日-7月20日	5月23日- 7月12日	11月6日- 2021年1月 (つづく)	6月28日- 9月21日	7月16日- 8月25日

種名 年度	クマゼミ	ツクツクボウシ	エンマコオロギ	マツムシ	クツワムシ
2018	—	—	? (9/16気付く) - 11月30日	8月28日 - 11月5日	7月30日 - 10月初旬
2019	7月17日-8月31日	8月12日-10月2日	? 8月6日-11月6日	8月18日 - 11月3日	8月12日 - 9月14日?
2020	7月16日-8月25日	7月28日-10月4日	? -11月19日	8月15日-9月20日 10月2日-10月8日	8月4日-9月21日

(3) 青谷らうんど

「みなでしゃべりまくろやないか、青谷について」。2018年の秋に青谷市辺在住の中野和好さんの熱い思いを受け継いで、「青谷てどんな所やろ?」、青谷を愛する想い、「これからの青谷をどうしていきたい?」など城陽市青谷地域のいろいろな問題をわいわいと話す場を作りたい、と何人かで相談し、「青谷やったらやっぱりまず梅や」と決めた。

2019年2月18日、第1回を青谷中村の梅農家の堀井洋二さんをお願いして、青谷の梅と梅農家の苦勞を話していただき、参加者みなでしゃべり合った。

表3 青谷らうんど2019年の語り部と話題

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
実施日	2月18日	3月25日	4月15日	5月20日	6月17日	7月29日	9月2日	10月21日	11月11日	12月16日
実施内容	青谷の梅	梅工房はなぜできたのか	青谷地域の文化財を通して青谷の歴史を語る	青谷で学んだこと	女子が紡いだ富国強兵・青谷養蚕の歴史から見えること	青谷に越して学び考えたこと	わたしのふるさと青谷	山砂利採集と保安林	青谷今昔物語	青谷梅林の文学と歴史
語り部敬称略	堀井洋二	田中昭夫	堀井宣雄	岩佐宣始	福富城介	好廣真一	中島和代	堀井宣雄	出島義男	小西亘

これ以降月に一度ずつ、青谷生まれの御二方を含め9人の方々に計10回お話いただいて議論することを続けてきた。青谷地域で意見や不満を持つ人は多いがそれは身近な人になにぶつけるだけで、多くの人の間で議論することが不足していると感じてきたからだ。話題は、梅、梅工房から、青谷の文化財と歴史、青谷小学校での学び、青谷での養蚕と富国強兵、梅林の文学、青谷今昔、山砂利採集と保安林に及び、それぞれに興味深くも面白く、あとのしゃべりに花が咲いた。参加者はのべ146人だった。

2020年は新型コロナウイルス感染の広がり、で、「会」を開けなかったが、世話人の間で何度か相談して、秋10月19日、前年の語り部の方に集まっていたき、「最初の一年を振り返る」回を持てた。「青谷らうんど」のこれからとして、青谷について学びながら議論を深めていくとともに、フィールドワークも加えて、青谷各所に出かけて行こうと考えた。かつての城跡や古墳、青谷ならではの風俗・習慣を尋ねて学ぶ取組、青谷の古老の方々にお話をいただいたり、青谷生まれの方々に、子どもの頃の暮らしを語っていただく、などを組合わせておしゃべりしていくのはどうか?と提案した。

11月、早速青谷の中村を流れる長谷川のフィールドワークを世話人中心で行った。長谷川は天井川で上流は砂利採集の、危険な川だ。その実情を歩いて知って、隣接する梅林とつなげて、遊歩道にしてはどうか?新しいまちづくりを企画して、2021年2月19日、城陽市土木課の課長、

技師と長谷川上流を歩き、問題点を指摘した。

(4)終わりに

毎年2～3月に行われてきた青谷梅まつりは、2020年、2021年と2年続けて中止された。しかし兩年とも、かなりの人たちが青谷梅梅林を尋ね、散策されている。冬の終わり、早春到来を告げる梅の花は、うれしくも、かぐわしく、りりしい。1月29日、昨年に続いて今年も城陽市にコウノトリの“ひかりちゃん”がやってきた。他にもう1羽もやってきた。

1996年7月～12月に、私達は城陽市全域でセミガラ調査を165人の市民参加で行い、翌年その結果を報告した場で、城陽生きもの調査隊を結成した（好廣他、2000）。子どもたちと共に市内の生きものを調べているが、近年の高速道路建設、その他の道路作りや森林伐採のため生物相は急速に貧しくなっていることを感じる。新型コロナウイルスの蔓延がおさまり次第、セミガラ調査を再度行って、1996年との違いを知りたい。

2011年11月、城陽富野久保田の小樋尻遺跡から、古墳時代前期の浄水祭祀と古墳時代後期の人口水路が発見され、「日本書記」に仁徳天皇と推古の時代に掘ったと書かれている「栗隈のおおうなで大構」かと注目された。市全体が遺跡の町と言われる城陽市では、縄文時代晩期以降各時代の遺跡が豊富に出ている。今回の大構？は、城陽市を南北まっぶたつに分ける新名神高速道路建設に伴う発掘で、たまたま見つかったものだ。

城陽市役所は新名神高速道路を利用したまちづくりを目指しているが、そいつは危険で、一部の企業の利益にこそなれ、住民の幸福にはつながらない。生きものたちと、人々の歴史を生かしたまちづくりこそ住民が末永く幸せに暮らせる道だ（洛南タイムス、2020年12月25日）。